平家物語考證

九

リ5
814
9

平家物語考証目録巻九

小朝拝の事
宇治川の事
河原合戦の事
木曽さいこの事
樋口のきられの事
六ヶ度合戦の事
三草勢そろへの事
三草かつせんの事
老馬の事
一二のかけの事

門 リ5
號 814
巻 9.

二度のかけの事
坂おとしの事
盛としさいこの事
忠度さいこの事
しけひらいけとりの事
あつもりさいこの事
ちまいくさの事
落あしの事
小宰相の事

平家物語考證巻之九

松堂閑入四醉生 編
洛陽後學源道格 集
羽林中郎將藤原定俊 補

一

小朝拜

院のは礼もおこなはれす院のはいれいなかりけれは内裏の小朝はいもおこなはれす

壽永三年正月一日或秘書記云拂曉四方拜如常今日無院拜禮院御所不及改鋪設云々又無小朝拜爲代始而依日次不宜也畧抑依爲御忌月不奏音樂并國栖笛聲叓先帝御時被宣下了當今又可同而重可有宣下哉否大將

成不審問遣大外記師尚之處事理重不可被仰之上延久元年例又不然云々今日又不被仰云々然而諸司存而不奏也

補九代略記村上天皇天暦元年正月二日戊子王卿参太上天皇朱雀院柏梁殿拜禮云云

小朝拜

古者皇帝御大極殿群官蕃客盡賀正朔謂之朝拜而又王卿以下殿上侍臣列立于清涼殿東庭而拜宸儀謂之小朝拜夫朝拜者百官同行其禮如小朝拜者特王卿侍臣得拜列焉故延喜中勅停小朝拜以見王者無私之義也尋延喜十九年群臣固請曰雖停廷臣之拜今尚有親王之拜臣子之道不可有異矣於此復其禮事見西宮記

せちゑ

補凡節會ト稱スル時ハ王臣同會ノ禮ナリ元日ノ宴會ハ皇太子親王公卿及ヒ諸國朝集使諸蕃賀正使等ニ宴ヲ賜フナリ

四方拜

補公事根源云仁和五年正月寅の刻ニ天地四方屬星山陵を拜し給ふ由宇多の御門の御記ニのせられ侍れとも濫觴とハ見へ侍らす皇極天皇元年八月に南淵乃河上ニ行幸ありて四方を拜し

終られハ雨五日迄降けるよし日本紀々の勢ら
きまれハ是なとをやはしめまゝ中へらん云ゝ
按ニ天地ヲ拝シ山陵ヲ拝セラルヽハ禮ト云べ
シ属星ヲ拝セラルヽハ陰陽家此事ニメ正禮ニ
アラズ

かんくてう

補雪山寒苦鳥ノ事法華直談等ニ見ヘタリ考べ
シ

東岸せいかん此柳ちそくをましへなんしほくし此
梅開落をてよをふして
東岸西岸之柳遅速不同南枝北枝之梅開落已異乃
慶保胤春生逐地形之序文也

まり

補蹴鞠ノ事水鏡皇極天皇ノ條下ニ云三年トヤ
シ三月ニ天智天皇乃中大兄王子ト申シヽ法興寺
みてまりをあそひし給し云ゝ按ニ中世以来蹴
鞠ヲ賞セラル済政頼輔等ノ達藝名ヲ専ニス上
世ハ打球ヲ尚テ蹴鞠ヲ尚ハズ打球ハ講武ノ一
事ナリ蹴鞠ハ閑曠ノ戯遊ノミ

小弓

補小弓結番ノ事源氏物語等ニ出タリ故黄門ノ
物語ニ今ノ楊弓ナルヘシ別ニ小弓ト云物ハ有

ヘカラスト云々按ニ藻塩艸ニ小弓ノ外ニ雀弓ト出セリ小弓ノ別名カ但シ尺素往来ニハ楊弓ヲ出セリ庭訓往来ニハ楊弓雀小弓ト並出セリ上世ハ一物ニメ後世ニ二物トナルモノカ古歌ニ秋のいほれおさまれる世のうれしきハまれあそひのまりこ弓まて

扇合

補古キ物語諸家日記等ニ詳ナリ

絵あはせ

補源氏物語ニ繪合ノ巻アリ須磨明石ヲ繪ニメ合タル事ナリ

草つくし

補鬪草ノ戯ヲ云諸家日記等ニ詳ナリ

虫はなし

補禁秘御抄云松虫鈴虫類人々進之或被召賀茂社司云々陳氏花鏡ニ虫ヲ多ク採ヒ聚ルコト見ヘタリ異邦ニモ虫ヲ賞スルコト同シ

宇治川の事

以下三段之事蹤或秘記所載都録于此

同正月五日或秘記云前源中納言来畧語云頼朝之軍兵在墨股今月中可入洛之由所聞也〇六日記云或人云坂東武士已越墨股入美乃了義仲大懐怖畏

云々○九日記云傳聞義仲与平氏和平事已一定此
事自去年秋比連々謳哥有樣々異說忽以一定了去
年月迫之比義仲鑄一尺之鏡面奉殺八幡或說熊野御正
躰裏鑄付起請文假名云々遣之曰茲和親云々○十日記
云人告云明曉義仲奉具法皇決定可向北陸公卿多々
可具云々是非深說云々○十一日記云今晚義仲下
向忽停止依有物吉也云々来十三日平氏可入京預
院於彼平氏義仲可下向近江國云々○十二日記云
傳聞平氏此両三日以前送使義仲之許云依再三之
起請存和平義之處猶奉具法皇可向北陸之由聞之
已為謀叛之儀然者同意之儀可用意云々仍十一日

下向忽停止今夕明旦之間可遣第一之郎從字楯云々即
逆返院中守護兵士等了云々○十三日記云今日自
拂曉至未剋義仲下向東國事有無之間变々七八度
遂以不下向是可遣近江之郎從以飛脚申云九郎
勢僅千餘騎云々敢不可敵對義仲之勢仍忽不可有
御下向云々因之延引云々平氏一定日今日可入洛
之處不然之条有之之由緒云々一ハ義仲奉具院可
向北陸之由風聞之故二ハ平氏遣武士於丹波國令催
郎從等仍義仲又遣軍兵令相訪然間平氏一定和平
了仍事一定已後遣脚力可引退之由仰遣之處猶企
合戰平氏方郎從十三人之首已梟了云々因茲置心

遅怠三ハ行家出逢渡野辺テ一箭可射之由令称云々
因此事遅々縦横之説雖難取信依非浮説記之○十
四日記云人傳之明後日義仲奉具法皇可向近江之
國云々事已一定也云々○十五日早旦人告云御幸
停止了依御　痢病也云々義仲獨可向云々或云不
可向云々隆職来語云　畧又云義仲可為征夷大将軍
之由被下宣旨了云々○十五日記云自去夜京中皷
騒義仲可遣江江之郎従ホ併以皈落敵勢及数万敢
不可及敵對之故云々今日奉具法皇義仲可向勢多
之由風聞其儀忽変改只遣郎従ホ如元鷲(警歟)固中可給
假又分遣軍兵於行家許可追伐云々凡自去(夜)至今日

未剣議定変々及数十度如反掌京中周章無物于取
喩然而及晩頗落居関東武士少々付勢多○十九日
記云昨今天下頗又物騒武士ホ多向西方為討行家
云々或又在宇治為防田原地手云々義廣(三郎先生)為大
将軍云々○廿日記云卯刻人云東軍已付勢多未渡
西地云々相次人云田原手已着宇治云々詞未訖六
条川原武士馳走云々仍遣人(令)見之處事已実義仲方
軍兵自昨日在宇治大将軍義乃寺義廣云々而件手
為敵軍被打敗了即東軍ホ来自大路大路入京(於九条河
原辺者一切無狼藉尤冥加也)不廻踵到六条末了義仲勢元不幾而
勢多田原分(二手カ)手其上為討行家又分勢獨身在京之間

遣此狭先参院中可有御幸之由已欲寄御輿之間敵
軍已襲来仍義仲奉弃院周章對戰之間所相従之軍
僅世卅騎依不及敵對不射一矢落了欲懸長坂方更
皈為勢多手赴東之間於阿波津野辺被伐取了
云々東軍一番手九郎軍士加千波羅平三云々其後
多次群参院御所辺云々法皇及祗候之輩免虎口
実三宝之冥助也凡日来義仲支度焼拂京中落
北陸道而又不焼一家不損一人獨身被梟首了天
之罸逆賊冥哉云々義仲執天下後経六十日比信
頼之㓛猶思其晩今日以々相ホ雖参院不被入門
中云々入道関白以弘家為使者両度上書共無荅

又甘摂政東弘家車参入程追帰了云々可弾指云々
○廿二日記云風病祈有感仍愁参院以定長被名問
事五ヶ条
一無左右可被討平氏之処三神御座被平此条如何可
計奏者兼又相副公家之使者於追討使下遣如何云
々申云若可有神鏡璽安全謀者忽追討不可然遣
副御使可被語誘歟又頼朝之許同遣御使可被仰合
此子細歟被副御使於追討使之条甚無所據歟
一可被渡義仲首哉否　申云左右共不可為事之妨但
理所至尤可被渡歟
一頼朝之賞如何

申云可被仰依請之由歟然者又若存無恩賞之由歟
暗被行被仰其由何事有哉於其官位等事者非愚案
之所及者
一頼朝可上洛哉否事
申云早可令上洛殊可被仰下於参否者不可知食早
速可遣之也者
一御所事如何
申云早々可有度御他所其所八條院御所外無可然
之家歟
定長語云昨日左大臣左大將皇后宮大夫堀川大納
言押小路中納言左右大辨等参入有議定各申条大

概同下官申状但平氏追討之間事左大臣右大將猶
不知劔璽可追討之趣歟是則叡慮如此云々（他事定餘々寄）
（示也）各被從形勢也不可然云々改被渡首棄長方云若
被渡遠國之賊首事歟云々（此事不可然也）又賞事左大將云
任討惠美大臣之時例被叙三品可宜云々（此事過分也）又此
外事一同云々退出了攝政内大臣如元之由被仰下
了云々天雖不弃國后弃之末世更生之恨尋宿業欲
報而已〇廿三日記云範季朝臣来語云平氏猶可被
追討之由被仰下了云々神鏡劔璽事猶不被重歟此
條神慮有恐為之如何云々

かまのはさうし

補系圖云於遠江國蒲生御厨出生云々曹司トハ古ヘ島曹司職曹司等アリ物語ニハ曹司ズミナト、アリ曹ハ廣韻局也今ノ部屋住ト云ナルヘシ

あしからをへて行と有云々

補足柄山ヲ越ルモノハ梅澤ヨリ沼津ニ出ツ箱根山ヲ越ルモノハ小田原ヨリ三島ニ出ツ浮島カ原ニメ同シク海道ニ到ル

のり口を引せ云々

補左ノ片口ヲ引ヲ云

白金つハもけ

補金銅鏡ノ轡ニアラス常ノ轡ヲ用フルナリ

八寸の馬

補爪際ヨリ取カミマデ三尺八寸ノ馬ナリ唐尺ニ依ルトキハ六尺奇ノ馬ナリ周禮ニ六尺以上為馬ト云トキハ選ニ中ルノ馬ナリ

ゑれそこにハ乱杭うつて云々

補孫呉ノ晋ヲ拒グニ江底ニ鉄鎖鉄椎ヲ用ルガ如シ

丹のたう

補丹黨ハ丹比等ノ支族ナルベシ紀清両黨ナド云類ナリ

ゆのゆゝし

補ユヒガミナルベシ

のゝめゝし

補按笴採刑ナル心キカ箭幹ノ直ナルヲ採撓メ屈曲セシメタル形ヲ云カ

きよまゝれたてまき

補魚綾ハ桃華蘂葉山鳩色云々

川原くつせんれ事

志けとゝれ弓の云ゝ

補射法書云重藤乃弓ハ國司ナラテハもつまじき物之何を軍陣弓ハ本重藤尤可秘之又云弓ニ

鳥打の事是も天智天皇れ時もしゆゐる之献鳥ニ始まく東方城州より時弓にて打落もゝさるニよりてうら笞一尺四五寸計の鳥之云ゝ按ルニ宝永年中新造ノ内裏ヘ還幸セノ時故黄門参議左中将セラル弓ノ鳥打の本ヲ紅梅以テ後陣ニ供奉セラル弓ノ鳥打ノ本ヲ紅梅ガ薄様ニテ巻キテ持タル或人イカカ申ス物ゾト尋ケレハ此モ藤ト云ナリ平家物語ニハ大将軍ノシルシト書キタレドモ大将ニハカギラズ誰ニテモ巻キテ持ベシト云々

木曽れさいこれ事

かゝあやおとしれよろひ

補名目古キ軍器ノ書ニ出テタリ

いしうち此矢の

補射法書云石打と云ハ鵄の羽也云々

阿ハ津

補粟津近江和歌ノ名所ナリ

木曽殿うち甲をいさせ云々

補東鑑云於近江國粟津辺令相摸國住人石田次郎誅戮義仲云々

ひ口乃きられ此事

今井ヵあふのひくちのほらふ云々

補東鑑云九郎主搦進木曽専一者樋口次郎兼光是為木曽使為征石川判官代日來在河内國而石河逃亡之間空以皈京於八幡大渡邊雖聞主人滅亡事押以入洛之處源九郎家人数輩馳向相戦之後生虜之云々

四つヵ

補四塚ハ九條朱雀ニアリ羅城門ノ舊趾ナリ

又死さいまをさゝめられる云々

補東鑑云此兼光者與武藏國兒玉之輩為親昵之間彼等募勲功之賞可賜兼光命之旨申請之處源九郎主雖被奏聞事由依罪不軽遂以無有免許云々

同しき廿二日影摂政臣とゝめさせ給ひてことゝの
摂政是為しめ給ふ

廿二日戊秘記云及秉燭右衛門督家通着仗座蔵人左衛門権佐親雅来仰可令前内大臣摂行政事左近大将藤原朝臣実定可還任内大臣之由上々移外座召大外記頼業仰云官人不候以奏時令敷弑不被下詔書為遠去年例云々又被仰摂政停止事上々被執申云々而被憚去年例云々不被下氏長者宣旨為三公之上并之上先年被下了之故云々其後於近衛亭覧吉書参院給之後有此事束帯先外記覧今日宣旨次官方光雅下次蔵人頭中将通資下次政所棟範次又官方基親未及夜半事訖云々

補公卿補任云摂政師家寿永三年正月廿二日止

職云々同云基通正月廿日如元為摂政并藤氏長者

むかし粟田北関白ハよろこひやの後たゝ七ヶ日にてなしそかし

大鏡云左大臣道兼公のおとゝハこきおほい殿の御三郎なりとのはきこえさすめり志ゝ長徳元年五月二日関白の宣旨かふらせ給ひて同し月の八日うせさせ給ひにき大臣のくらひ五年関白と申て七日そおはしましゝと云々 ○補栄花物語ニ粟田関白薨逝ノ事ヲ書タル巻ヲ見はてぬ夢と題ス粟田ハ道兼山荘ノ地ナリ拾遺二条右大臣

北粟田の山里は障子ゑゑに旅人の紅葉の下に宿
とりけるを今よりは紅葉はとまに宿りせし情も亦
旅は日数をふへし　無芸

其名にせちゑもちとも云々
補百練抄元暦元年正月一日節會不進服赤贄依
西國賊乱也云々又玉葉云壽永三年正月一日節
会如例云々七日早旦見叙位聞書云々又壽永二
年十二月京官除目等アリ

ゆしき廿四日云々
補東鑑廿六日ニ作ル

ひくちはゞしハ云々
補東鑑云囚人兼光同相具之被渡訖云々

あゐすりはひくゝき
補藍ニテ摸様ヲ摺タル布直垂ナリ兼光ハ本ヨ
リ位秩アル者ニアラス染色ノ直垂ニ烏帽子ヲ
着スルニ及バス物語ノ華詞誤リナルヘシ

つてに少云々
補史記前漢書等ニ詳ナリ

去程に平家ハ云々
補東鑑云平家日来相従西海山陰両道軍士数万
騎構城郭於摂津與播磨之境一谷群集云々按ニ
平氏ノ將校名ヲ着スモノ多クハ山陽南海ノ豪

傺ナリ物語ノ記スル所ロ適セリ東鑑ハ傳聞ノ
謬リナルヘシ

らんぢやうを

補乱聲ナリ楽曲ニモ乱声アリ軍防令ニ鼓及ヒ
大小角ヲ出セリ鼓吹ノ具ナリ

一ちやうの弓のいきほひ云々

補三尺剱光氷在手一張弓勢月當心許渾ノ詩ニ
メ朗詠集ニ出タリ

赤はた

補按スルニ軍防令義解云将軍所載曰纛幡又兵
書曰赤幢常在大将不得動揺赤者火也火土之母
故軍主長服赤幢云々然レハ古ヘ受命ノ将帥赤
色ノ幡ヲ用フルモノカ平氏ノ祖先曽テ将校タリ
ルモノ赤幡ヲ用フルニ依テ後世子孫沿テ用フルナル
ヘシ

かとのくわんしや

六ヶ度ヶ川せんの事

補盛衰記掃部冠者ニ作ル為義五男掃部助頼仲
ガ子ナリトス系圖ヲ按ニ頼仲カ子ニ源秀ト云
アリ是ヲ云カ

あいちのくらんしや

補盛衰記為義四男左衛門尉頼賢カ子トス系圖ヲ

按ニ為義十一男為家ヲ淡路冠者ト稱ス又頼賢カ子義房ト云アリ是ヲ云カ

三くさせいそろへの事

以下之事實或秘記所載都録于此

同正月廿九日或秘記云又聞西国事被遣追討使事一定也今日已下向去廿六日出門云々其上猶静賢可遂使節之由有仰静賢辞退云々其故被遣御使者令休彼畏懼之心為三神安穏入洛也而遣勇者征伐之上何及尋常之御使哉道理不叶又難遂使節之故也云々所申尤有理歟近日之儀如反掌不便々々

同二月一日記云昨今追討使ホ皆悉下向云々先追落山陽道之後漸々可有沙汰云々〇二日記云或人云向西國追討使ホ暫不遂前途猶逗留大江山辺云々平氏其勢非尫弱鎮西少々付了云々下向之武士殊不好合戦云々土肥二郎實平次臣親能ホ此両人頼朝代官也相副武士ホ所令上洛也或御使被誘仰之儀甚甘心中云々而近臣小人ホ朝方親信親宗ホ触少辨北面下薦云々一口同音勧申追討之儀是則法皇之御素懐也仍流棹無左右事歟此上左大臣又被執申追討之儀云々凡此条甚理雖可然不被重被神鏡釼璽之条神慮如何天意又不主者歟〇三日記云今日行家入洛其勢僅七八十騎云々依院召頼朝又免勘氣云々〇四日記云源納言示送

勢数万云々来十三日一定可入洛云々官軍ホ合手之間一方僅不過一二千騎云々天下大事大略今朝云々〇六日記云或人云平氏引退一谷赴伊南野云々但其勢二万騎云々官軍僅二三千騎云々仍可被加勢之由申上云々又聞平氏引退事謬説云々其勢不知幾千万云々〇八日記云未明人走来云自式ア権少輔範季朝臣許申之此夜半許自梶原平三景時許進飛脚申云平氏皆悉伐取了云々其後午剋許定能卿来語合戦子細一番自九郎許告申（搦手也先落丹波城次落）一谷云々次加羽冠者申案内（大手自濱地寄福原云々）自辰剋至巳剋猶不及一時無程被責落了多田行綱自山方寄寅前被落山手云々大略籠城中之者不残一人但素乗船之人々四五十艘計在島辺云々而依不可遁欲没放火焼死了疑内府ホ歟云々所伐取之輩交名未注進仍不進云々剣璽内侍所安否同以未聞云々

二月四日此日云々

補東鑑二月四日ノ條下云今日迎相國禅門一廻忌景修佛事云々

ゝふまてとあれハ云ゝ

補此ノ歌集ニ見ヘス慈鎮和尚ノ歌ニ同シキ下ノ句アリ若シ是ニ依テ符會セルカ

大外記中原此とゝろるをゝ子云ゝ

補中原ノ系圖ヲ按ニ大外記師直カ子ニ師純ト云者ナシ師方ト云アリ大外記タリ補任ノ年月ハ詳ナラス

兵アの少捕まさあき〜

補尹明ハ武智麿裔東宮学士知通ノ子ナリ系圖ニ鎮西御坐藏人トアリ是ノ時ノ補任ナルモノカ

昔将門東八ヶ國をうちしたかへて云々

詳見第一巻

二位の僧都せんしん

補系圖ヲ按ニ詮真清盛ノ弟也

人志き須勢ぬこを思ふ云々

補新古今雑部ニ出タリ承仁法親王ノ詠ナリ

みふさうり

補簠簋内傳云日之塞方五日西云々深忌之

さうこ日

補又云道虚日六日出行深凶云々

大手の大将軍云々

補両将ノ帥ル所ノ将士ノ名東鑑ト異同アリ兵ノ数物語ニハ義経ノ部下一万餘騎ニ作ル東鑑二万餘騎ニ作ル

三草かつせんの事

平家のかたの大将軍云〻

補東鑑云平家聞此事新三位中将資盛卿小松少将有盛已上七千餘騎着于当國三草山之西按ニ播磨ノ名所ニ三草河アリ此ノワタリカ

此田代のくわんしやとのハ云〻

補系圖云田代冠者信綱工藤介茂光息女子也非實子云〻

らうその事

是や昔河邊の蛍云〻

補伊勢物語はるゝ夜の星か川邊の蛍かもわか

すむかたの海士乃たく火か

らうをふまつるむすんて云〻

補春秋後語云桓公伐孤竹春往冬還迷失惑道管仲曰老馬之智可用乃放老馬而随之遂得道

こしのおの志ゆうし云〻

補鷲尾系圖ニ平氏トス況ヤ荘司ト稱スルトキハ物語ノ獵師ト云ハ誤レリ

一二のかけの事

くれなゐのほろをかけ

補軍器崙云伊豫守頼義貞任退治之時相催ス兵士共ニ七人武蘿ヲ掛サセタルヨシ記録ニ見ヘタリ云〻武蘿ヲホロト訓シホロノ起緒トス猶

考ヘアルヘシ

おとめらをへしほころと

補慈姑ノ花葉ヲ藍ニテ摺タル模様ナリ摺トハ
今ノスリコミナリ糊ヲキニテ染ルハ後世ノ事
ナリ

ふしるいあみまろひ

補軍器書云楷縄目紺糸ニテ紅ヲ交ヘ威ナリ

しけめゆひみひされ

補目結ハ今ノ鹿子ナリ滋目結ハ總鹿子ナルヘ
シ

二引両

補二引両トハ両ノ字或ハ龍ニ作ル龍ノ形ヲ模
セリト云尺素往来二量ニ作ル各字義穏ナラス
量ノ字ニ依テ按ニ亘ノ字ナルヘキカ二引ワタ
シト云コトヲ誤レルモノナランカ

小村このひさま

補村濃ト云トキハ紫ヲ以テ段々ニ染ルナリ又
村紺ハ藍ヲ以テ染ルナリ

二とみくけの事

可考

げたをはき

補京都本願寺ノ煤取ニ下々ト云履ヲハクコト

アリ其制藁ヲ以テ織成ス常ノ藺履ニ比スレハ
稍闊大ナリ高貴ノ所用ニアラズメ下々ノ所用
ナルモノカ

私れう

補私ハ姓ナリ凡ソ某ノ黨ト称スルハ一姓ノ族
類ナリ豪傑タル者ハ別ニ称号ヲ立ツ高家ト云
是ナリ

とりやしさいこれ事

こゑたくれ中より云こ

補児玉ハ藤原氏閑院冬嗣ノ流公卿補任平知盛
永暦元年武蔵守ニ任ス

ゑつ中れせんしとりとし

補東鑑ニ盛國ガ子ト云々又山槐記ヲ考ニ盛俊
越中ノ重任タリ凡前司ト称スルハ未得解由ノ
吏ナリ任終帰京ノ後解由アル吏ハ功過ヲ考テ
秩ヲ進メ内外ノ官ニ任ス未得解由ノ吏ハ選ニ
預ラス散位ヲ以テ退居ス盛俊平氏ノ親ニメ勇
幹ノ名アリ他ノ未得解由ノ例ニテハアルマシ
恐ラクハ昇殿或ハ三品ヲ仰望スルモノカ

翁ふせりなるふ云こ

補盛俊重任ノ國司ナリ大夫ナルコト決セリ侍
ト云ベカラズ昇殿ヲ得サルヲ以テ快々タルモ

ノカ
たゝみかりのさいこの事
くハうミやうへむせう云々
補観無量寿経ニ出タリ
星よ志ゆくれ花云々
補二十一代集并ニ忠度百首等ニ是所見ナシ
あつもりさいこの事
くまかへかわつもんの心を出きまくれ
補東鑑ヲ按ニ建久三年熊谷直実久下権守直光ト荘地ノ境ノコトニ依テ相論ス直実カ訴ヘ利アラス直実忿怒メ僧トナルトアリ敦盛カ死ヲ哀ムニアラス
まさハ小えさと哉云々
補拾芥抄名物笛部ニ載タリ
もはいくさの事
くんとつ太郎
補東鑑武藤資頼カ兄ナリトス
新中納言とゝとまりれハ云々
補按ニ知盛献中ヲ脱メ行在ニ詣ス男知章従者頼賢トモニ戦死ス知章孝子ノ名ヲ全シ頼賢忠臣タルコトヲ得タリ知盛目ノアタリ臣子ノ難ヲ見テ救ハズ身ヲ脱メ逃ル慄夫ト云ヘキヤ曰

然ラス宋ノ文天祥ガ所謂ル宗社存一日則盡臣子一日之責ト是時官軍覆敗ストイヘドモ皇帝ナヲ恙ナシ何リ臣子ノ難ヲ援ガタメニシテ一身ヲ捨ンヤ知盛勤王ノ志ヲ以テ處シカタキニ處ス忠臣ト云ヘシ

此る院の御ひさう云々

補玉葉等ノ諸記ニ此事所見ナシ

泰山府君

補陰陽家ノ祀ル所ナリ長壽ヲ祈ルカタメニス祭文等朝野群載ニ出タリ博物志曰泰山一曰天孫言為天帝孫也主召人魂魄東方萬物始成故知

人生命之長短

おちあはれ事

あしやの沖

補蘆屋摂津國和歌ノ名所ナリ

あはちのせと

補淡路迫門和歌ノ名所ナリ

ゑしまかいそ

補同國和歌ノ名所ナリ山家集ちとり鳴ゑしまの浦にすむ月を波にうつして見る今宵かな

小さいしやうの事

一ツもちを

補
般舟讃ニ見ヘタリ

志ろ妙もは

補夫ノ喪ニ處スル服ナルベシ

ねりぬきれ二ッきぬ

補此モ凶服ト見ヘタリ二衣ハ表着一重ナリ

忠臣ハ二君よ云々

補史記王蠋カ傳ニ出ツ忠臣不事二君烈女不更
二夫

此女ほしとやハ云々

補勧修寺家ナリ参議為隆孫刑部卿憲方ノ女祖
父ノ官ニ依テ小宰相ト稱スルカ

見そめ出まうし女房也

補消息ノ和歌ニ就テ婬奔ノ事ヲ記ス物語ノ華
詞ナリ細谷河ノ和歌ハ納幣ノ贈答ノミ實ニ此
ノ如キ事アルニアラス

小野の小町

補系圖ヲ按ニ篁ノ孫出羽守良真ノ女